

発信 地域から



函館

函館盲学校・聾学校

130周年

㊦

模型が語る歴史と未来

函館盲学校の玄関から廊下を歩いていくと、すぐに神社と寺の模型が飾られているのが目に入る。木製でそれぞれ縦121センチ、横91センチ。日本文化を手で触って理解するため教員たちにより教具として作製されたとされる。手作り感のある素朴なものだが、同校の和田悟教頭は「歴史が詰まった大事なお宝です」と語る。

8000〜1968年）が函館を訪れた。函館盲学院（現在の函館盲学校、函館聾学校）で講演し、在校生らに「たとえ目が見えなくても心眼が開いていけば、その人は決して盲目ではない」と語りかけたという。

また、盲啞院では贈られた着物に腕を通すなどして子供たちと交流。この模型にも触れ、「神社は開放的で明るい感じ、お寺はさびしい感じ」と話したと伝えられている。

この模型は長い間、函館盲学校の倉庫に保管されていたが、2010年に函館盲学校に育後援会がヘレン・ケラー生誕130周年を記念し、当時の資料とともに展示し、再び光を当てた。市は昨年7月、この模型を函館の特別支援教育の歴史的教具として、市の有形文化財に指定。市教委文化財課の木村元子課長は「函館の障害者理解の歴史を刻む文化財として保護していく」と話す。

知覚の可能性

市立函館博物館では今年4月、文化財指定に合わせ、この模型の展示を企画している。長年いたり、視覚や聴覚に障害のある人の感覚について研究し、視覚・聴覚障害の人が使用する感覚代行器などを開発してきた公立はこだて未来大の岡本誠特命教授（知覚デザイン）が協力する。単に模型を置くだけではなく、視覚障害者向けの支援ツールのほか、盲聾教育の歴史を伝えるパ

ヘレン・ケラー

1937年（昭和12年）6月、視力、聴力、話す能力を失う三重苦を乗り越えた米国の社会福祉事業家ヘレン・ケラー（1



神社と寺の木製模型に触れ、形を確かめるヘレン・ケラー（右から2人目） 1937年6月

市立函館博物館では今年4月、文化財指定に合わせ、この模型の展示を企画している。長年いたり、視覚や聴覚に障害のある人の感覚について研究し、視覚・聴覚障害の人が使用する感覚代行器などを開発してきた公立はこだて未来大の岡本誠特命教授（知覚デザイン）が協力する。単に模型を置くだけではなく、視覚障害者向けの支援ツールのほか、盲聾教育の歴史を伝えるパ

（函館報道部 白石翠）